

神奈川の道徳

日本道徳教育学会
神奈川 支部
令和4年5月25日発行
第20号

日本道徳教育学会神奈川支部 道徳フォーラム2022

今年度支部研究テーマについて

研究テーマ 「道徳科における個別最適な学び、協働的な学びの実現を目指して」

Society5.0の時代である現代、IOTをはじめ社会の在り方も変化している。今までに新たな時代に移行している。また新型コロナウイルスの感染拡大など、予測困難な未来に対して新しい価値の創造は必要不可欠である。

道徳性を育む一方、令和の日本型学校教育の中で示されている「個別最適な学び」「協働的な学び」に注目しテーマの解釈、授業実践、子どもの見取り、理論路実践の往還を中心にしながら、道徳における個別、協働の在り様を考えていく。



研究実践発表① 「道徳の授業における私の個別・協働のとらえ方」

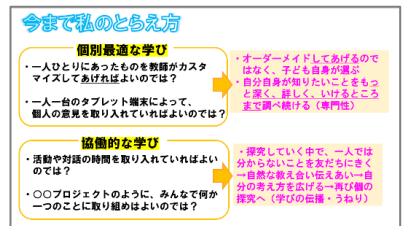
(支部会員 綾瀬市立綾西小学校 吉田雄一教諭)

(個別最適な学び) △教師が子ども一人ひとりに満足するものをカスタマイズする。

→〇一人ひとりが自分の・自分自身が知りたいことを深く、詳しく、専門的に考え続ける。

(協働的な学び) △対話的活動、プロジェクト活動を行う。

→〇一人では分からないから友だちにきく、自然な教え合い伝え合い、学びの伝播が生まれる。



〇個別最適のヒントとなった授業

「3年理科の風とゴムの実験」

- ・どの子も真剣になる課題 ・自分に合った実験方法の選択 ・繰り返しの探究 ・自然な聞き合い・教え合い
- ・全員参加といった姿が見られた。このような姿は道徳科の授業でも取り入れられるのでは？

〇道徳授業における個別・協働のポイント→「問い」だと考える

例) 「なぜ勉強するの？」

- ・大人も子供考える、人によって答えが違う。思わず他の人の意見を知りたくなる問いを考える。
- ・登場人物の心情や、場面設定を飛び越えるように問いの質を考える。

〇実際の授業「友だち屋」

「友達のつくり方って何だろう？」という問いを設定 ←身近でありながら意外と答えが分からない

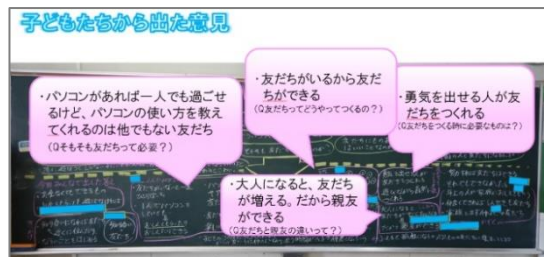
(授業の流れ)

- ①問いからさらに個人の問いをつくる (個別)
- ②クラス友だちの問いをきいて、さらに自身が深めたいことを整理する (個別)
- ③グループで、話すことで新しい答えを知る (協働)
- ④別のグループの話聞いて新しい答えを知る (協働)



⑤今日学んだことの再構成をする（個別）

45分の中で疑問を持ち続け更新していくことで学ぶサイクルが生まれる。個人の思考→全体共有といった流れは今までの授業とは変わらないが、「問いの質」を変えることで授業者の意識を教材の外側に向けていく。



研究実践発表②「生徒の『あこがれ』からスタートする道徳教育」

(支部会員 岩手県盛岡市立上田中学校 山田将之教諭)

○学校全体で取り組む道徳教育の基本方針

- ・学校基本目標と関連した「心豊かに人生を幸せに歩く」という道徳教育のあり方について職員・生徒全体で共有している。

○(Doutoku + quest) 道徳+探究

- ・主体性のカギとなるものは生徒一人ひとりが発する「問い」である。
- ・答えが一つではないこれからの時代を生きていく「自分の芯」(=納得解)をつくっていく。

- ・自分の納得解がしなやかな判断力につながると考える。
- ・一時間の授業の積み重ねだけでなく、年間のカリキュラムが大切である。
- ・生徒一人ひとりが年間の問いをつくる。
- ・生徒を授業の主体にする。

○心の原点である「あこがれ」をスタートにする道徳教育の全体計画

- ・幼稚園教育要領の「憧れ」、小中学校学習指導要領の「憧れ」→第三者的なあこがれ
- ・小学校低学年にとつての憧れは、偉人やスターなど第三者に対する憧れであるが、中学生では「生き方」に対する「あこがれ」を追究させたい。・ひらがな表記の「あこがれ」は、自己実現へ向かう根源的欲求と校内で定義し、学習指導要領上の漢字表記の「憧れ」と区別している。
- ・生徒にアンケートをとって、重点内容項目をA- (4)「希望と勇気、克己と強い意志」、B- (6)「思いやり、感謝」とした。ここをスタートに個々の「あこがれ」に広げていく

○職員間での意識の共有

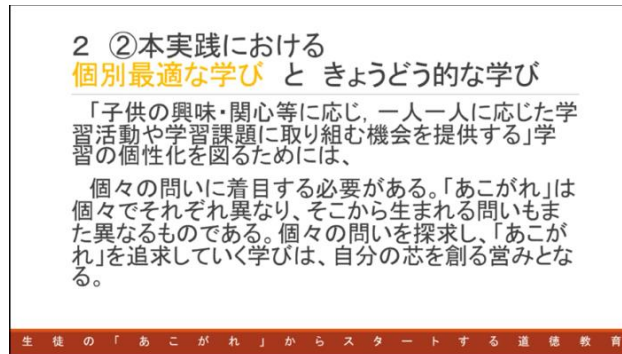
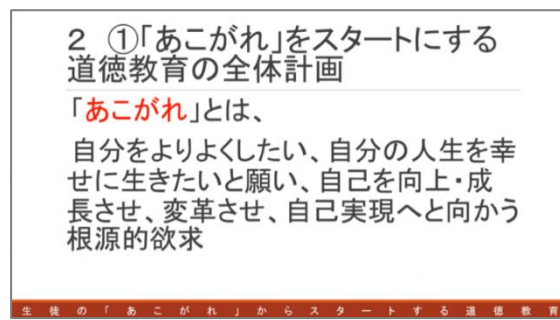
- ・各教科の教師で「あこがれ」のアプローチの仕方について話し合う。
- ・スタンディングミーティングをしながら、どんな実践をするかを話し合う。
- ・個別最適な学びの視点から、個々が追求してあこがれをつくっていく。

○実際の授業より

- ・道徳は何をする時間ですか→近くの人と相談する。
- ・おにぎりを例に「のり」の巻き方について議論する→答えは一つではない。これは道徳でもいえること。違いを認める視点、正解がないことについて考える。
- ・愛とは「心で受け止めること」である。
- ・一枚の写真から問いを考える→同じ写真でも見る人によって色々なことを考えられる。

○「あこがれ」から生徒一人ひとりの自己実現へ

- ・「自分で自分を美しく より美しく 染め上げて下さい」(サトウハチローの詩)
- ・「一年生はスタートライン、どんな中学生になりたいか、どんな自分になりたいか。」(道徳教科書より)
- ・「自分にうそをつかないとはどういうことか」「努力とは何なのか」→こどもの振り返りではあこがれに対して、一人ひとりが自分の中で新しい問いを持つことができた。



講演 「個別最適な学びと協働的な学びを実現する道徳教育」

西野真由美先生（国立教育政策研究所 教育課程研究センター 総括研究官）

○個別最適な学びの捉え

- ・令和答申の考え方を確認し道徳で実現していくためにどんなことを考えていけばよいか。
- ・当初は「個別最適化された学び」（アダプティブラーニング）という名称だった。しかし学びを最適にしていくのは子ども自身である。
- ・他者と協働しつつ、考えながら自立した学びを実現する。中教審で議論の結果「個別最適化された学び」から「個別最適な学び」へ変更。
- ・個別最適な学びと協働的な学びの一体的に充実させることを令和答申では提案されている。
- ・孤立的な学びになってはいけない。
- ・ICT活用は個別最適な学びよりも、むしろ協働的な学びの中で位置付けるイメージ。
- ・指導の個別化と学習の個性化。（学習の自己調整）
- ・個別と協働は「主体的・対話的で深い学び」と異なるものではなく実現するための背景にあるものである。
- ・公正に最適化された学び→多様な子供たちをだれ一人残さない。
- ・発言力の弱い社会的な弱い立場の子どもを守るための多様な学びを、学校で保証することでもある。

○個別最適な学びと協働的な学びの関係

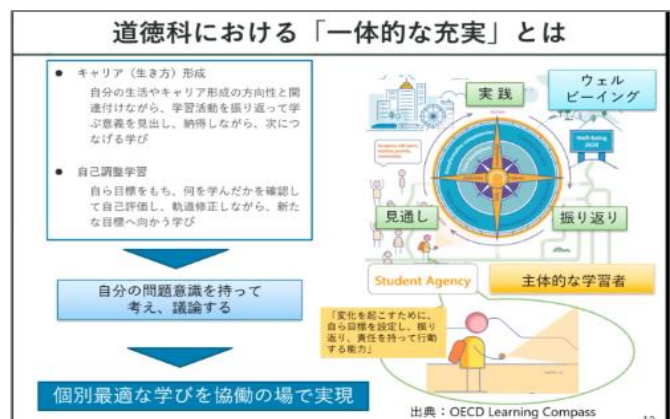
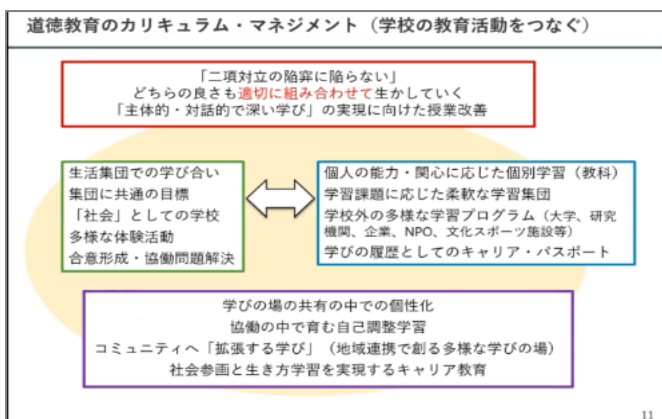
- ・これら二つの学びを往還するという文言があるが、個別・協働は別々に存在しているわけではない。個別と協働には両方の要素が含まれていて一つの学びとしてとらえる。一体的に充実するものである。
- ・タブレットも一人一人が孤立する道具ではなく、協働で活動するための「道具」である。

○これからの学校教育のニューノーマル

- ・多様な学びを社会が認めていけるような教育の在り方（多様性と包摂性）
- ・教育現場の正解主義と、同調圧力からの脱却。
- ・教師と子供で勇逸無二の授業をつくっていく。
- ・多様性の承認は格差の承認ではない
- ・形式的平等ではなく、困っている人に役立つ実質的な手立てを考える。
- ・誰一人取り残さない 一人ひとりの居場所を学校や社会につくる。
- ・エデュケーション2030にも示されている「社会全体の中で学校教育をつくる」という考え方。
- ・「学びの場」としてのICT活用。ICTはコンテンツではなく新しい学習の環境の作り方と捉える。

○今後の授業づくりについて

- ・協働的、探究的な学びのなかに個別最適な学びを実現していく。
- ・多様な個性を発揮しながら、互いに問いを探究していく。
- ・個別⇄協働という二項対立に陥らない思考法。「二つをつないで新しいものをつくる」という発想
- ・自己調整という言葉→個人内だけでなく、協働的な学びの中で自己調整を図る。
- ・エージェンシー →変化を起こすために自分で目標を設定して行動する能力とされているが、本来は、「関りの中で育っていく力、いろいろな人や周りの人が支え合う中で育っていく力」を指している。
- ・キャリア調整と自己調整を授業の中で実現する。
- ・学級として探求する問い、その中で自分自身の問題意識をもって取り組む道徳授業が求められる。



○授業実践より 「長なわ大会の新記録」(光村図書3年生)

【あらすじ】

主人公は縄跳びの応援に夢中になってしまい、ストップウォッチを押し忘れ新記録が出てしまう。それをクラスの人々に言うべきか葛藤する。

- ・予習として教材を読み、一人ひとりが問いをもって授業に臨む。
- ・子どもたちから出た個人の問いを大切にする。教師が考えた問いと、子どもが考えた問いの共通点を探す。

(子どもの個人の問いの例)

- ◇どうやったら正直に言えるのか ◇明るい心で生活するにはどうすればよいか ◇なんで正直が大切なのか
- ◇主人公がこれからどうするかを知りたい ◇みんながうれしかったらうそをついてもよいのか

【授業の流れ】

(クラス全体で考える問いの確認)「どうしたら正直な行動ができるのだろう」

- ・ストップウォッチを押し忘れたため新記録が出てしまったことを「だまっておくべきか」「正直にいうべきか」今の子どもの今の気持ちを問う。

(A児の答え)「黙っていれば、ほかの人から攻められることもない。黙っておいた方がみんながうれしい。」

(教師)「登場人物の男の子でなく、教材の3年2組のみんなの立場から考えたらどうなのか。」

(A児の答え)「それでも言わないほうがよい。君のせいで記録が下がってしまったといわれてしまう。」

(B児の答え)「僕は言った方がよいと思う。本当にできたということにはならない嘘を教えるということになるから。もう一回すっきりやり直した方がよい。」 A児B児の異なる考え方。

- ・正直にいった時のロールプレイをすることで、どんな気持ちになるか実際に体験させてみる。

(クラスの児童の反応)

「たしかに3秒忘れていたことはよくないけど、夢中で応援していたからしょうがない、君のせいじゃない。」

「本当の実力の回数だからしょうがない。もう一度計ればいい。」

- ・正直にいったどんな気持ちになったか整理する。

(クラスの児童の反応)

「みんなの実力と言われたら仕方ないと思ってしまうかも。」「でも嫌だなという気持ちもある。」

「正直に真実を言うことはドキドキする。」「しかし正直にいったことは決して悪いことではない」

- ・「明日へのプラスワン」これからの自分に生かす方法を考える。

(教師)「何故主人公は正直な行動ができたのか、何がそうさせたのか？」

(クラスの児童の反応)

「自分で決める心決心があったから」「勇気と正直な心」「正義」「仲間に対する信頼、受け止めてくれるみんな」「みんなの喜んでいる心」など今まで学習してきた様々な考えが出てきた。唯一の答えは出なかったけど、葛藤する主人公の心を見つめることができた。

(A児の「明日へのプラスワン」)

自分は言わない方がよいという考えをもち続けながらも、授業を通して「正直に言うとは嫌われることもあるかもしれないけど、みんなの心もすっきりとすることが分かった」という答えを45分の授業の中で出すことができた。

○まとめ

- ・クラス共通の問いの中で、自分の問いを追究していくことは可能である。
- ・全体で考える一つの問いの中に、自分の問を埋め込んでいく学習形態の可能性を提案した授業である。
- ・正直というテーマを通して、今までの学びの連続性を感じさせる。
- ・学校教育目標の実現させるために、パッケージユニットのようなテーマのある学習単元をつくることも有効。

「学び」の連続性とつながりを創る	
■ 学校としての「重点」化	各学校が、子どもや地域の実情に応じて、重点化する内容や育成を目指す資質・能力を共有 本校が大切にしたい 目標を共有
■ 「テーマ」のある学習単元の構想	・ 内容項目間の関連を意識してひとまとまりの単元に ・ 道徳・特別活動・総合・教科の学びをつなぐ ・ 学校の特色を生かして「現代的な諸課題」に取り組む
■ 「振り返り」で学びを意味付け⇒次につながる問いを育む	・ 「この授業で何を学んだか」(感想ではなく変化に気付けるように) ・ 「これからの自分に生かしたいことは何か」(転移) ・ 「解決しなかったこと(もっと考えたいこと)は何か」

活動が制限される中ではありますが、今後の道徳教育、道徳の授業について語る貴重な機会となりました。また、次回も先生方と一緒に勉強できることを楽しみにしています。

(詳しい内容につきましては神奈川支部ホームページをご覧ください。) <http://www.doutokukanagawa.com/>